

vivo

水戸芸術館音楽紙 [ヴィーヴォ]

4 APRIL 2004

CONTENTS

ファジル・サイ ピアノ・リサイタル ...1、2
SELF PORTRAIT / 近藤良3
最近の公演から3、4
ネットマ&petite 情報5
インフォメーション6



ファジル・サイ

聴きのがしにご注意！ 驚異の新世代ピアニスト、 水戸オリジナル・プログラムによるリサイタル！

4 / 18(日)ファジル・サイ ピアノ・リサイタル PIANISM / SAY - ISM

(グールド+グルダ)÷2+ =ファジル・サイ？

ああ、またとんでもないあおり文句を書いています。でも仕方ないのです。ファジル・サイなので。サイのご紹介をしようと思ったら、グレン・グールドとフリードリヒ・グルダという天才ピアニスト2人の名が、反射的に浮かんで来てしまったのです。あっ、あなた今「ほんとにかよ」と思われましてね。正直筆者も、彼がデビューした頃の、「ほんとに凄いのかな」という先入観がありました。しかし一聴驚嘆。瞠目仰天。今やこうして無謀を承知で、この2人をキーワードに、4月に芸術館に登場するトルコ出身のピアニスト、ファジル・サイの魅力に迫ってみたいと思っているのです。

まずグールドとの比較。「グールドの再来」という言葉はこれまでも湯水のように使われてきた宣伝文句ですが、サイに関しては大げさではないと思います。共通点としてはまず、メジャー・ブレイクするきっかけとなったのが、国際的コンクールで優勝

ディスク発売というよくあるパターンとは違い、1枚のディスクであるということ。グールドは1955年のメジャー・デビュー録音 ゴルトベルク変奏曲によってセンセーションを呼びましたが、サイにとっては1997年に録音されたモーツァルトのピアノ・ソナタ集がそれにあたります。このデビューCDがフランスで即座に10万枚を超える爆発的なヒット(クラシック音楽において1国で10万枚という枚数はポップスでいえばミリオン・セラーに匹敵するメガ・ヒットです)となったことから、伝説の幕が開きました。この超ヒットを受けてサイはテルデック・レーベルと契約、数々の話題盤をリリースし

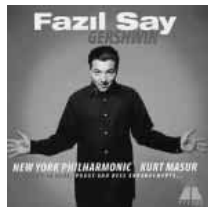
てワールド・ワイドに活躍することになったのです。コンクール等によって権威づけされるのではなく、ディスクを通じ音楽そのものの魅力を聴きとった人々の感嘆の声によってスターダムに押し上げられる このあたりすでに、グールドと似た「ただ者ではない」匂いがします。

そして、聴き慣れた名曲をみごとにリフレッシュさせ、しかもそれが奇を衒った感じのない自然さで実現されている点において、サイの演奏はグールドの演奏と(表面上の類似ではなく本質的な意味で)似たところがあります。グールドは、長大で難解と思われていたバッハの ゴルトベルク変奏曲 を醒めた知性と熱狂的なグルーブ感でめくるめく喜びの時間に変えてしまいましたが、サイのモーツァルトにも、同様の印象があります。デビュー・ディスクに収められたモーツァルトのソナタたち、中でも今回のリサイタルで取り上げられるトルコ行進曲付き のスリリングなこと！冒頭楽章の変奏曲から、粒のそろったクリア極まりないタッチで旋律が奏でられ、それがまるで生き物のように変容していく様には息を呑まずにはいられません。モーツァルトの楽譜にはないフォルテとピアノの対置がつけられたり、即興的な装飾音がきらめいたり、あるところではびっくりするようリタルダンドがあったり...しかもそれが奇異に感じず、モーツァルトの音楽の、聴き手の予想を常に裏切る天才的な意外性を鮮やかに実現しているのです。いわば精神の深いところでモーツァルトと「共振」している、そんな演奏。そして終楽章のトルコ行進曲は、彼自身のトルコの血が騒ぐのか、まるであの

トルコの軍楽隊の進軍が目の前に迫ってくるような凄さ！トルコ風打楽器の効果を備えたフォルテピアノではない現代のピアノで、こんな体験をしたことは初めてでした。サイは次のアルバムではバッハを録音、イタリア協奏曲 にみせる予想通りいやそれ以上のスウィング感、プゾーニ編曲のシャコンヌ(今回のプログラムでも演奏)における深いエモーションの発露によって、「ポスト・グールド」の名をますます不動のものとしします。ちなみに、弾いているバックで自身が歌っている声がかすかに聞こえるのも、グールドそっくり(?)です。

グールドとサイ、どちらも聴き手を「自由」にしてくれるピアニスト。しかしグールドの自由が、どこか「孤独」という言葉と二重写しとなるのに対し、サイには対照的に、コミュニケーションへの明るい意志や、伝統や約束ごとを気持ちよくすりぬけてゆくパワフルな冒険者の姿を感じます。3枚目のアルバムでは、グールドが弾くことのなかったガーシュウィンを取り上げ、自分と小編成のアンサンブル(ニューヨーク・フィルの名クラリネット奏者、スタンリー・ドラッカーを起用!)のために編曲したボーギーとベスのナンバーを冒頭にもってくるのはじつぱり。そして4枚目は後述するストラヴィンスキー 春の祭典 2台ピアノ版多重録音(編曲はもちろんサイ)。ここに来て聴き手の私たちは完全に度肝を抜かれることとなりますが、これも鬼面人を驚かそうという意図ではなく、作曲家でもあり 春の祭典 をこよなく愛する彼が長年抱いてきた夢の実現にほかなりません。こうした自由さ、作・編曲も含めた総合的な音楽家である

写真左より;
ディスク



うという姿勢は そう、ウィーンの偉大なピアニスト、フリードリヒ・グルダを思い出させるのです。モーツァルトやベートーヴェンに名演を聴かせる一方でジャズやロックを愛し、自作作曲を自らの「バラダイス・バンド」で披露し、即興も余裕でこなしリコーダーまで吹いたトータル・ミュージシャン、グルダ。しかも「永遠の反逆児」のイメージが終生つきまとったグルダに対し、サイは逆逆すべき権威などはじめから存在しないかのような、生まれながらの自由さを身にまとっているのです。冒頭の見出して、「新世代」という言葉を用いたのは、このためです。

テルデック・レーベルが規模を縮小してしまったため、サイは新たにフランスの Naive 社と契約しました。日本発売の権利を得たのはなんとエイベックス・クラシックス! 同社から3月24日、作曲家でもあるサイの自作自演アルバム『ブラック・アース』(AVCL - 25006)が発売されます。浜崎あゆみらメガヒット・アーティストを抱えるエイベックスがスタートさせた話題クラシック・レーベル(これまでに中村紘子、古典四重奏団、波多野睦美、有田正広と個性的なアーティストたちの強力盤を発表)がサイに目をつけたことにより、日本でもさらなるサイ・ブレイクが巻き起こることでしょう。そして、その開幕ベルを鳴らすのが、来る4月の2度目の来日ツアーであることは、まず間違いありません。

超名曲と超・編曲でお届けする水戸オリジナル・プログラム!

今回の来日ツアーにおいて、水戸芸術館のプログラムは日本で1回しか行われぬ、独自のものです。まず前半は、すでにご紹介したモーツァルトのソナタ トルコ行進曲付き とバッハ(ブゾーニ編曲)の シャコンヌ、それに加えてまだ彼のディスクでは聴けないベートーヴェンのソナタ 悲愴 を。ダイナミックな両端楽章を、そしてピリー・ジョエルもカヴァーした第2楽章のあの名旋律をサイがどう弾くのか、期待はつきません。そもそも悲愴 もモーツァルトの トルコ行進曲付き も、なんと意外にも芸術館の招聘アーティストによるピアノ・リサイタルでは初めて取り上げられる曲ではありませんか! ちなみにバッハ/ブゾーニの シャコンヌ(原曲はご存知 無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番 の終楽章)も初登場曲目です。

そして後半は話題のストラヴィンスキー 春の祭典、サイ編曲版です。「これまでの自分の録音において、モーツァルト、バッハ、ガーシュウィンはい

わば食前酒であり、春の祭典こそメイン・ディッシュ」と語るサイ。彼にとって 春の祭典 は、10代で尊敬する師を失い、悄然としていたときに偶然ラジオで聴き、生きる力と音楽への愛を回復させてくれた思い出の曲なのです。

ちょっと驚きかもしれません。春の祭典 といえば、原始ロシアの人々の儀式をモチーフとしたストラヴィンスキーの大傑作バレエ音楽。しかしニジンスキーが振り付けメントゥーが振った1911年 シャンゼリゼ劇場における初演は音楽史上に残る賛否両論の怒号飛び交う大騒動、作曲者は命の危険を感じて会場から遁走、居合わせたサン・サーンは曲への恐怖のためひとことも口が聴けなかったという、スキャンダラスな作品です。もはや古典とはいえず、めくるめくりズムの饗宴、厳密ながらも野性的なその音楽を、身構え抜きで即座に生と愛の象徴として受け容れるあたり、やはりサイの新世代たるゆえんなのでしょ。

サイはこの曲を録音するにあたり、多重録音というテクノロジーを駆使することを忌避しませんでした(このあたりも、録音における「編集」を積極的にとらえたグルッドと似た精神を感じます)。音楽の骨格を抜き出した「プリンシパル・ライン」と呼ぶ初期ヴァージョンをまず録音し、そこへキャンパスに色をつけるように多重録音を重ねていったとのこと。時に内部奏法(ピアノの弦を直接はじいたりする)まで駆使したそのヴァージョンがいかに迫力に満ち、演奏されすぎた感もあるこの曲にどれほど強烈な生命力を取り戻したか、それはもうディスクを聴いていただくしかありません。いやいや訂正、まもなくその実演に私たちは出会えるのです。

実演? そんなことが可能でしょうか。ここでもサイは新しいテクノロジーを積極的に採用します。演奏データを内蔵したコンピュータによって演奏されるピアノ(つまり音は電子音でなく完全な生ピアノの音)というヤマハの画期的な発明品「MIDIピアノ」をサイは用いました。かつて芸術館で行われた坂本龍一と岩井俊雄とのコラボレーション時にも威力を発揮したMIDIピアノ。このピアノに1台分(それ以上?)の 春の祭典 の自らの演奏データを吹き込み、ライブでもう1台のパートを弾き「共演」するのです。多重録音よりいっそうの困難と危険が伴うこのチャレンジ、日本ではプレス対象の限定イベントで1回行われただけ。それが(間違いなくパワーアップして)水戸で初めて一般の聴き手の前に姿を現すのです。これは、初演さながらの興奮に満ちたイベントとなるはずですよ。

いかがでしょう。「超名曲」と「超・編曲」を揃え、ファジル・サイの天才を存分に感じていただく今回のプログラム。ピアノの眠っていた可能性が「目覚め」、ピアノが文字通り「変わる」瞬間を、体験していただけるはずですよ。もうこれ以上何も申しません。ただ一言、Meet Fazil! Feel Say!《矢澤

!

【ファジル・サイのディスク・ガイド】(エイベックス盤以外)

(発売はすべてワーナー・クラシック ~、のCDナンバーは来日記念3/24再発売以降のもの)

トルコ行進曲~サイ・ブレイズ・モーツァルト (WPCS-11742)

*トルコ行進曲つき のほかソナタ2曲とキラキラ星変奏曲も収録。吉田秀和館長がレコード芸術2001年4月号『ディスク』欄で高く評価。「この人は若々しさと、心憎いばかりの計算の確かさ、細かさの両面を併せ持っている点で、並々ならぬ器であるといっていいただろう。」

シャコンヌ!~サイ・ブレイズ・バッハ (WPCS-11741)

*ヒューイットのバッハもすばらしかったが、サイも鮮やかの一音。2年の間に芸術館で現代ピアノによるバッハ演奏の最先端の二人が聴けることになる。シャコンヌ はとにかく必聴!

ラブソディ・イン・ブルー~サイ・ブレイズ・ガーシュウィン (WPCS-11743)

*表題曲のほか アイ・ガット・リズム変奏曲 3つのプレリュード などいろいろ入って超ゴキゲン。サマータイム は遅いのと速いのと2ヴァージョン入れる心憎さ。

ストラヴィンスキー: 春の祭典 2台ピアノ版 (WPCS-21228)

*黒田恭一氏が初出盤の帯に書いた名文句「ファジル・サイの尋常ならざる情熱は鋼鉄の塊であるピアノをあやうく溶かしかねない」一方海外盤にはエンハンスト仕様で録音風景の映像が収められていた。

チャイコフスキー: ピアノ協奏曲 第1番&リスト: ピアノ・ソナタ 短調 (WPCS-11744)

*意外な組み合わせだが、必然性あるカップリングだとライナーノーツを読んで納得。そのヴィルトゥオーゾぶり、同郷トルコの名サッカー・プレイヤー、イルハンの華麗なプレイのごとし。

*これら5枚のききどころを集めたベスト盤『ファジル・サイを聴け!』(WPCS-11283、1,260円と安い)もあり。



写真左から;
近藤 良、百武由紀、
白澤暁子

新コーナー！ SELF PORTRAIT

平成 16 年度の「茨城の演奏家による企画シリーズ」トップを切って 4 月 25 日(日)に登場するのはクラリネットの近藤 良さんとその仲間たち(ヴィオラの百武由紀さん、ピアノの白澤暁子さん)。ドイツで留学、アマデウス弦楽四重奏団からも高く評価され、現在は茨城県南部の鹿行地域を拠点に活躍する近藤さんの芸術館初登場です。モーツァルト、グリンカ、ライネックというトリオ 3 曲によるプログラムにける近藤さんの思いを、ご自身から語っていただきます。《矢澤》

ドイツ留学の後、日本に帰国して 20 年の歳月が過ぎようとしています。

日本で学んだその先をとの思いで渡独し、自分でも感心するほど夢中になって勉学に励んだ結果、全く最初からやり直さなければならぬ事に気づきましたが、幸いにも師との出会いに恵まれ、私にとって人生の中で最も収穫の多い日々だったと言えます。

帰国してからも頭の中に詰め込んだだけの知識を、一つ一つ本当の意味で自分のものにする為に、鹿行の地に於て研鑽してまいりましたが、思えば沢山の方々に支えられての歩みでした。

ところが、気がついてみると世はバブルを通じ

繁栄から崩壊の過程を経て、全く違う社会へと変貌をとげてしまいました。特に心の世界の崩壊は著しく、それは連日伝えられる信じがたいニュースとして私達を驚かせています。

人々が音楽に求める主な内容も「音を楽しむ」娯楽であり、心を慰める「癒し」となった様であります。

しかし、私が学生として過ごした 1970 年代のドイツでは、学生も先生方も何か音楽に対する「哲学的」な感覚をもっていたといえます。

例えば、技巧の正確さより「音楽的」であること、美より「真実」であることを絶えず要求されましたし、「耳で聞く」ことより「心の耳で聴く」ことを強く

求められました。

現代日本の社会のなかでは、もうすっかり時代遅れの価値観ではありますが、素晴らしい出会いの中から得たドイツでの音楽の学びは、言葉では言い尽くせない程の喜びを私に与えてくれました。何故なら、抽象的としか思えない「心の世界」の出来事を実感へと導き、生きる希望と勇気を私に与え続けているからです。

4 月 25 日の芸術館でのコンサートでも、古い価値観であるかも知れませんが、娯楽でも癒しでも無い、心の耳に感動を与えられる演奏が出来ればと願っています。

近藤 良

最近の公演から

JANUARY
FEBRUARY



1



2



3

ATMアンサンブル第 19 回演奏会(2 月 1 日)& 第 10 回碧南演奏会(1 月 31 日)
「生誕 150 周年記念 ヤナーチェク、生命の森の音楽」と題し、ヤナーチェクの室内楽作品を集めた一夜。メンバーに加え、ATM 初登場の川本嘉子、ジュネーヴ国際音楽コンクール 2 位入賞の山本亜希子、そして濱崎由紀、若佐雅美、高橋臣宜という 3 人の管楽器奏者を迎えたアンサンブルでお楽しみいただいた。碧南市芸術文化ホールでの公演はなんと満席の盛況。このアンサンブルをいつも楽しみにされている碧南の方々の熱気ある反応は嬉しい限りである。水戸公演は活躍中の音楽学者・伊東信宏氏のプレトーク付き。ヤナーチェクの「会話旋律」を枕に、ミラン・クンデラのヤナーチェク論を引用しながら彼の音楽の「失われ行くものを慈しむまなざし」へと鮮やかに切り込んで行く。利口な女狐の物語の歴史的上演のビデオも一部上演されるなど、充実した内容に聴衆は聞き入っていた。4 曲の演奏はどれも全力投球の熱演、ないしょの手紙が終ると共に大きな感動の拍手が巻き起こった。《矢澤》アンケートから ヤナーチェクのシリーズ、初めて聴きました。メロディーが我々に変親しみや

すく、従来とは違った形式破的な音もあまり気にならず、好感の持てる曲です。ファンになりました(水戸市:Y.M.さん) ことばに言い表せないほど感激しました。深い心の奥でかたりかけた手紙、ものがたり風、幸せでした。演奏者の方々にブラボーです(無記名の方) 解説(プレトーク)のおかげでよくわかった。どれも力のごもった演奏ですばらしかった(水戸市:T.N.さん)

水戸芸術館専属楽団メンバーによる

訪問コンサート(2 月 3 日)

6 回目を迎える「水戸芸術館専属楽団メンバーによる訪問コンサート」。今年は、水戸室内管弦楽団メンバーの川崎洋介(ヴァイオリン)と、彼の信頼する仲間たち、ウォルフラム・ケッセル(チェロ)とヴァディム・セレブリャーニー(ピアノ)によるトリオで、身体障害者通所授産施設「のぞみ」と茨城県立こども病院へ伺い、トリオとそれぞれのソロの曲を、お話を交えながらお聴きいただいた。「のぞみ」では、リハーサルを聴いて「これは、モーツァルトの曲だね。クラシック大好きなんです」と本番を楽しみに待つ方や、川崎さんの問いかけに元気に答える方、こども病院では、歌ったり、



1



2



3



4



5



6



7



8



9

バッハのプレに合わせて踊ったりするお子さんたちなど、終始楽しい雰囲気の中でのコンサートとなった。また、「のぞみ」でコンサートを聴いた方の一人は、後日、感想を詩にしてお送りくださった。「また来てね」と、手を振る皆さんの温かい笑顔が、3人のアーティストの胸にも焼きついたことでしょう。なお、プログラムは、petite 情報をご覧ください。《馬場》

中学生のための芸術鑑賞会(2月4、5、6日)

中学生にクラシック音楽の楽しさを満喫していただくよう毎年開催している鑑賞会。水戸市立中学校全15校と茨城大学附属中学校および茨城中学校の1年生、およそ2,600人をホールにお招きした。出演者は上述の「訪問コンサート」に引き続き川崎洋介(ヴァイオリン)、ウォルフラム・ケッセル(チェロ)、ヴァディム・セレプリアーニー(ピアノ)、ピアノトリオ作品を中心にバッハからシェーンベルクやショスタコーヴィチまで、さまざまな時代、様式の作品が紹介された。さらに、モーツァルトの作品にはワトーの絵画というように、演奏される作品と関連のある絵をスクリーンに投影しながらコンサートが行われた。《中村》中学生のアンケートから 今日感動を忘れずに、いろいろな音楽に興味を持ちたいです!(第三中:S.G.さん)

今回のような企画は、普段勉強や部活であわただしく過ごしている私達にとって、ゆとりのあるひとときとなり、とても良かった。(附属中:Y.Y.さん)

生のクラシックを聞いたけど思ったよりかっこよくて自分もやってみたいと思った。(笠原中:Y.Y.さん)

ちょっとお昼にクラシック3(2月6日)

上記「中学生のための芸術鑑賞会」と同じ出演者・内容で、平日の昼間にお楽しみいただくコンサートとして開催しているのが「ちょっとお昼にクラシック」シリーズ。たしかに「ちょっと」の気分で楽しんでいただける1時間のコンサートではあるが、川崎洋介をはじめ出演者たちの演奏は渾身のものであった。その熱気はステージから客席へと放射され、聴衆をも巻き込んでいった。《中村》アンケートから とてもよかったです。ぜひぜひこのプログラムで小学生や中学生に聴かせたいと思いました。曲目の説明と絵で音楽をよりわかりやすくしているプログラムが、とてもよくできていて、もうぜったいおススメです。(無記名の方)

絵画で時代の雰囲気を感じつつ、生の音を楽しめて大変よかったです。(水戸市:M.H.さん) トリオとは思えないほどの最後の曲(ショスタコーヴィチ:ピアノ三重奏曲 第2番より第4楽章)、圧巻です。(無記名の方)

現代音楽を楽しもう - XVII

アンサンブル・ノマド(2月21日)

「N響アワー」の司会者としても馴染みの作曲家で、水戸芸術館音楽部門の企画運営委員でもある池田晋一郎企画のシリーズが「現代音楽を楽しもう」。その第17回となる今回は、アンサンブル・ノマドの公演をお届けした。ノマドといえば、現代音楽の演奏では、今わが国でもっとも注目を浴びているアンサンブル。その魅力は、従来の堅苦しい現代音楽の枠を取り払った、自由で躍動感にあふれる選曲と演奏だ。今回のプログラムもピアノ、カーゲル、ライヒ、武満など、現代音楽の予備知識などは無く、真っ白な状態で接しても、心が震えるような作品が用意された。また、今回の公演のために池田晋一郎 TANADA II を書き下ろした。ひたすら下行音形が繰り返されるエネルギーッシュでスリリングな作品に聴衆は酔いしれた。《中村》アンケートから のびやかな演奏で、楽しめました。現代音楽はちょっと、と思っていたが間違っていたようです。(無記名の方)

TANADA II の初演を聞いたのは幸せでした。演奏家の人数以上の音の広がりイメージで、楽しめた。(友部町:M.W.さん) 非常に楽しいアンサンブルでした。これからもノマドのアグレッシブな活躍を期待しています。(無記名の方)

ファミリー・ワークショップ

『サウンド・ハンティング』(2月22、28、29日)

小杉武久コンサート メディア・ミックス (2月29日)

作曲家・演奏家の小杉武久を講師に迎え、18名の小学生と8名の大人の方が参加した音楽ワークショップ。小杉自作のコンタクトマイクを使って、さまざまな音を捕まえた。コンタクトマイクというのは、マイク自体の振動を直接キャッチするもので、今回は、それをラジカセにつないで音を増幅させて楽しんだ。参加者はいろいろな音の出し方を工夫した。たとえばコンタクトマイクをコップの底に貼り付け、数個のビー玉をコップの中で回してカラカラという音をキャッチするなど。2日目は、芸術館の広場に飛び出し、ごつごつした壁にコンタクトマイクをあてて擦ってみたり、玉石が敷かれた床の上を引きずってみたりして、さまざまな音をハンティングした。最終日は、ワークショップの成果が凝縮された新曲 コンタクト・ミュージック が、聴衆の前で演奏された。また、「メディア・ミックス」と題されたコンサートでは、光の点滅や強弱に音が反応するシステムを使った オープン・ミュージック など、小杉武久のソロ・パフォーマンスも披露された。なお同コンサートには、サウンド・アーティストの藤本由紀夫がテクニカル・アシスタントとして特別参加した。《中村》アンケートから 何が癒しの音になるかわからないと思った。慣れると、なるほどと思った。(水戸市:M.S.さん) 1曲1曲のアイデアがとてもすばらしく、おどろかされた。(無記名の方)



*nettama= ネットワークする猫、タマ。芸術館のコンサートをサカナにいるんなところへnettamaします。

The dark side of the moon(2)

前回の予告どおり「踏み越えてしまった」作曲家の世界を訪れてみたい。まずよく知られているところではローベルト・シューマン(1810 - 56)。晩年のシューマンが精神を闇に蝕まれ投身自殺を図り最終的には精神病院で終焉を迎えたのは有名な話だが、岸田緑溪という人の書いた『シューマン 音楽と病理』(音楽の友社)を読むと、彼は若いころから躁鬱、不安神経症、解離障害といった症状を頻繁に示していたという。その原因は特定できるものではないそうだし、彼の音楽をいちいちこれらの症状と結びつけて考えることは、少なくともここでやるべきことだとは思われない。初期のクライスレリアーナと晩年のチェロ協奏曲はまるで別人のように異なる音楽だけれども、どちらもすばらしい音楽であることに変わりはないものね。ただ、たしかに晩年の作品には初期の高揚感よりも深いメランコリーの中に沈んでゆくような作品が多く感じられる。前述のチェロ協奏曲とか2曲のヴァイオリン・ソナタとか…。中でも僕にとって印象的なのは、作曲活動のほとんど最終期に書かれた「暁の歌」だ。夜から朝へ向かう時の移ろいを「描写ではなく感情として」(シューマンの言)表現したこの作品、しかしその恐ろしいほどの静けさはむしろ「幽明の境」という印象を感じさせる。さらにシューマンは、投身自殺をはかる直前に幻聴に苦しめられながら、天使が歌ってくれる主題を聞きとり、それに基づく5つの変奏曲を書いた。その主題は前年に書いたヴァイオリン協奏曲第2主題に似ているが、それは重要ではない。むしろ、闇の世界へ決定的な一歩を踏み出す直前にシューマンが見た天国的な、救済の世界を垣間見せる不思議に澄み

切った、晴れ渡った音楽がひどく感動的なのだ。それにしても、前記『シューマン 音楽と病理』はシューマンの病状の進行とそれを見守る妻クララやブラームス、ヨアヒムら年若い友人たちの一挙一動を、彼らの手紙や日記を引用しながら、克明に描く鬼気迫る内容であり、特に絶望とわずかな希望との間で引き裂かれているクララの姿は痛ましい。と同時に、これほどの悲劇に見舞われながら、たくさんの子供たちを育て家事をこなし、同時にピアニストとして演奏活動も行っていった彼女の強さを思う。今よりもはるかに女性の役割が抑圧されていた時代に、どれほどの困難と彼女は闘わなければならなかったか想像を絶するものがある。朝の歌、そして天使の主題による変奏曲は、伊藤恵さんのCD(フォンテック FOCD2521)で聴ける。

シューマンの病は、いまだ原因に諸説あるが、ペドルジーハ・スメタナ(1824 - 84)の場合ははっきりと外因性、つまり梅毒によるものだったらしい。はじめそれは聴覚の障害となって現れ、最後には精神に破綻をきたして生涯を終えることになった。しかし「モルダウ」で有名なわが祖国は、迫りくる聴覚異常と闘いながら作曲されているし、失聴への恐怖を刻んだ弦楽四重奏曲第1番「わが生涯より」は感動的な傑作だ。そして最後の大作となった弦楽四重奏曲第2番は、記憶喪失や鬱状態、言語障害とまさに格闘しながら作曲されたすさまじい曲である。そこかしこに異様な響きや奇妙な展開が聞かれ、それはスメタナが捜し求めた新しい音楽言語だったのかもしれないが、作曲者の心の中での苛烈な闘いのドキュメントとなっている。スメタナ四重奏団のCD(デノン COCO70435)。

旅へのいざない などほんの十数曲の歌曲

によって不朽の存在となっているアンリ・デュバルク(1848 - 1933)は、36歳で作曲活動の継続が不可能になった。それは、極度に研ぎ澄まされた知覚のあまりの過敏さによる、神経衰弱だったという。おそらく深い絶望にさいなまれながらも、彼は少なくとも日常を平穩に過ごし、家族を愛し、やがて訪れた視覚の喪失をも「神がわたしに内的に生きよと望んでおられるのだらう」と従容として受け入れた。残された十数曲、波と鐘、フィデレ、前世など…時間的には「小曲」であるこれらの曲の中には、ほんの少し不用意に触れただけでも壊れてしまうような繊細な感覚と、大きな交響曲やオペラにも匹敵する途方もなく劇的な力が、奇跡のように共存している。スゼー盤(EMI TOCE9842)。それにしても、彼がもし未完に終わったオペラ「ルサルカ」を完成していたら、いったいどんなものになっただろう? フォーレの「ペネロプ」やドビュッシーの「ペレアスとメリザンド」と比肩する作品になっていたのかもしれないなあ…。

まだまださまざまな例はあると思うけれど、もう十分だろう。この旅を試みて、僕に中には最初「恐れ」があったのだが、それは最後には「勇気」に変わっていた。彼らは、想像を絶する心の闘いの記録を僕たちに残して世を去った。巨大な困難にはからずも出会ってしまった人間が、どれほど感動的なものを生み出すことができるか。彼らの音楽は、僕たちを、目もくらむ崖づぶに立たせながら、その深淵を逃げずに見つめ、すべての人間が心に持っているその深さを受け止めて生きていく力を与えてくれるのだ。



スメタナ:弦楽四重奏曲第1番&第2番のCD(スメタナSQ)



プチ情報 速達

*2月3日(火)に行われた川崎洋介(vn)、ウォルフラム・ケッセル(vc)、ヴァディム・セブレリャーニー(p)による「訪問コンサート」(「最近の公演から」欄をご覧ください)の曲目をご紹介します。

モーツァルト:ピアノ三重奏曲 変口長調 K.502 より 第1楽章 / バガニーニ: 24のカプリッチョ 作品1より 第24曲 イ短調 / バッハ: 6つの無伴奏チェロ組曲 第3番 八長調 BWV1009より プレ/ドビュッシー: 映像 第1集より「水に映る影」 / モーツァルト:ピアノ三重奏曲 変口長調 K.502 より 第3楽章 / [アンコール]千と千尋の神隠しより「いつも何度でも」

*続いては、同じメンバーによって行われた「中学生のた

めの芸術鑑賞会」と「ちょっとお昼にクラシック3」の曲目をどうぞ。

モーツァルト:ピアノ三重奏曲 変口長調 K.502より 第1楽章 / プロコフィエフ:ヴァイオリン・ソナタ 第1番 へ短調 作品80より 第2楽章 / ショパン:チェロ・ソナタ 短調 作品65より 第3楽章 / バガニーニ: 24の奇想曲 作品1より 第24曲 イ短調 / J.S.バッハ:フーガの技法 BWV1080より 第19曲 / ドビュッシー: 映像 第1集より 第1曲「水に映る影」 / シェーンベルク:ファンタジー 作品47 / ショスタコーヴィチ:ピアノ三重奏曲 第2番 短調 作品67より 第4楽章

information

チケットに関するお問い合わせ

...水戸芸術館チケット予約センター / 029-231-8000
営業時間 / 9:30 ~ 18:00(月曜休館)

公演内容や企画に関するお問い合わせ

...水戸芸術館音楽部門 / 029-227-8118

【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

NHK-FM水戸【FM水戸アップデート】火曜日18:15頃~15分ほど(不定期登場) 水戸周辺83.2MHz、日立周辺84.2MHz。

茨城県の演奏家による企画を募集します。.....
平成17年度の茨城県の演奏家による演奏会企画を下記の要領で募集いたします。従来の「茨城県在住の演奏家による演奏会企画」がリニューアルしました。応募枠も実施枠も広がります。

【応募要項請求方法】直接水戸芸術館エントランスホール・チケットカウンター(9:30-18:00 月曜休館)にて直接入手 80円切手を貼付し返信先を記入した封筒を同封の上、下記宛て郵送 下記宛てFAXで請求

【応募対象】個人:茨城県内の住民票をお持ちの方 / 団体:茨城県を中心に活動されている団体 ただし、平成16年度の「茨城県在住の演奏家による演奏会企画」にご出演された方は応募できません。

【受付期間】2004年5月8日[土]~5月22日[土] 当日必着)

【結果の発表】2004年9月頃

【開催時期】平成17年度(2005年4月~2006年3月)

【提出資料】所定の申し込み用紙 これまでの演奏歴を示す資料(演奏会チラシ等) 住民票の写し 2004年1月1日以降の演奏のデモ・テープ(またはDAT、MD)

【問い合わせ先】〒310-0063 茨城県水戸市五軒町 1-6-8 水戸芸術館音楽部門「演奏会企画」係 TEL 029-227-8118 FAX 029-227-8130 (担当:矢澤)

畑中良輔の日本のうた セミナー第4期受講生募集.....
最終期となる第4期の受講生を募集します。詳しくは、応募要項をご覧ください。

【応募要項請求方法】上記、茨城県の演奏家による企画の方法と同じ。

【セミナー日程】2004年9月12日、11月21日、2005年1月16日

【受付期間】2004年4月23日[金]~5月7日[金]

【問い合わせ先】〒310-0063 茨城県水戸市五軒町 1-6-8 水戸芸術館音楽部門「畑中良輔の日本のうた セミナー」係(担当:関根)

チケット・インフォメーション 4月4日(日)発売分.....

水戸室内管弦楽団第57回定期演奏会

6/26(土)18:30開演、6/27(日)14:00開演

料金(全席指定):S席¥8,000 A席¥6,500 B席¥4,500

水戸室内管弦楽団第58回定期演奏会

7/7(水)18:30開演、7/8(木)18:30開演、7/9(金)18:30開演

料金(全席指定):S席¥13,000 A席¥11,000 B席¥8,000

第57回と第58回のセット券(限定300セット):S席¥19,000 A席¥16,000

発売初日に芸術館でお求めになれるチケットは、水戸室内管弦楽団第58回定期演奏会ではお1人様1回につき2枚までとさせていただきます。
水戸室内管弦楽団定期演奏会には、友の会の先行予約があります。

これからの演奏会・残席情報.....

○...残席あり(20席以上) ...残席わずか(20席未満) x...残席なし 中央...中央ブロック 左右...左右ブロックおよびステージ裏 補助...補助席

ファジル・サイ ピアノ・リサイタル

4/18(日) ...中央、左右・裏

近藤 良と仲間たち 4/25(日) ...自由席

音楽物語 ぞうのババール 5/5(水・祝) ...自由席

ナタリー・シュトゥツマン コントラルト・リサイタル

5/22(土) ...中央、左右

ベリオの肖像 6/5(土) ...中央、左右・裏

北村さゆり ピアノ・リサイタル 9/18(土) ...自由席

3/10(水)現在の状況です。

公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問い合わせ下さい。

固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館の主な4月のスケジュール

コンサートホールATM

ファジル・サイ ピアノ・リサイタル PIANISM / SAY -ISM

4/18(日)14:00開演 料金(全席指定):A席¥4,000 B席¥3,000

近藤 良と仲間たち 4/25(日)14:30開演 料金(全席自由):¥3,000

エントランスホール

パイプオルガン プロムナード・コンサート

4/3(土)13:30/15:00 4/4(日)12:00/13:30 4/11(日)12:00/13:30

ヴァリエーションズ 茨城県内の演奏家による、さまざまな器楽や声楽が登場する演奏会シリーズです。

4/10(土)13:30/15:00 尺八:岡本孝司 箏:岡本千邦子

入場無料 演奏は各回20分程度です。

ACM劇場

野村万作抄12 「附子(ぶす)」「武悪(ぶあく)」 4/3(土)18:30開演

料金(全席指定):S席¥4,000 A席¥3,000 B席¥2,000

東京やなぎ句会 7人7色トークショー 4/17(土)16:00開演

料金(全席指定):¥3,000

こまつ座公演『父と暮せば』 4/23(金)19:00開演、4/24(土)14:00開演

料金(全席指定):A席¥4,000 B席¥2,500 3/28(日)チケット発売

現代美術センター

「孤独な惑星 -lonely planet」展

4/10(土)~6/6(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)

休館日:月曜日

入場料:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600

中学生以下・65歳以上・各種障害者手帳をお持ちの方は無料

茨城の主な4月の演奏会

常陽藝文センター TEL / 029(231)6611

松永貴志トリオ ジャズコンサート 4/17(土)18:00開演

(問)EVANS TEL / 029(251)6665(13:00~)

水戸市民会館 TEL / 029(224)7521

武蔵野音楽大学同窓会茨城県支部第32回定期演奏会

4/25(日)14:00開演

ひたちなか市文化会館 TEL / 029(275)1122

桜井大伍ピアノコンサート (ヴァイオリン:吉野薫・チェロ:小川剛一郎)

4/2(金)19:00開演

日立シビックセンター TEL / 0294(24)7711

「第14回ひたち出身者によるコンサート 音楽の園」

4/11(日)14:00開演

シビックセンター合唱シリーズpartII 「合唱と管楽の調べ」

4/18(日)15:00開演

日立市民会館 TEL / 0294(22)6481

少女舞踊集団「花やから」 4/1(木)14:00開演、18:30開演(2回公演)

錦織 健 テノール・リサイタル 4/22(木)18:30開演

ギター文化館 TEL / 0299(46)2457

高橋竹童 津軽三味線リサイタル 4/11(日)15:00開演

ノバホール TEL / 029(852)5881

少女舞踊集団「花やから」 4/2(金)14:00開演、18:30開演(2回公演)

(問)つくば都市振興財団 TEL / 029(856)7007

つくば学園都市オーケストラ第33回定期演奏会 4/18(日)14:00開演

水戸芸術館音楽紙【ヴィーヴォ】 2004年4月発行 第98号

編集・発行/水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130

e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp/]

編集/水戸芸術館音楽部門(五十音順):関根哲也 中崎美智代 中村 晃 馬場千恵

矢澤孝樹(編集長)

DTP / office west

印刷所 / 株式会社あけぼの印刷社

次号は...初夏の風に2人目の歌姫登場。
そして、ババールが踊るソウ!